〔研究ノート〕

風　土　論　覚　書

――三澤勝衛「風土論」の今日的意義――

裴　　富　　吉

目　　次

I　はじめに
―どうして三澤勝衛「風土論」をとりあげるのか―
II　三澤「風土論」の概要
―経営学からみたとりまとめ―
i）風土解明の必要性
ii）風土性とは（定義）
iii）時代性と風土性
―時間性と空間性―
iv）日本の風土性を研究する意味
v）風土に即した産業
―「風土産業」論―
III　問題点の考察

I　はじめに

――どうして三澤勝衛「風土論」をとりあげるのか――

筆者は，かねてから，自分なりに「経営と風土の接点」という経営学の分析視座をたずさえて，とくに「日本の経営」問題にそれを対置させるつもりで研究をすすめてきた者である。その成果は，わずかではあるが，拙著 ――『経営学の基礎研究』昭和53年，『現代経営学の基本問題』昭和55年―― に収められた論稿中に展示されているとおりである。だがそこにおける研究のあり方は，いまだ方法（論）中心，抽象的思弁的論議の域を出ず，なお実質的な内容研究をあいともなってはいなかった。後者の補てんと充実を完備させ，方法と内容を正面から対峙させた段階にいたって，はじめて筆者の意図は，その意義と評価いかんを加えうる前提条件を入手することになろう。このことは別の拙稿 ――「風土論考－経営学的究明」（未発表論文，1980年6月脱稿済）――をもって，ようやく「地域主義」の主張（広義の経済学とも呼称されているもの）に連絡する方途を考えつき，『地域主義の経営学』という実体研究の場を展望し，開拓しうる地点にまで到達したところにある。この意向はさらに今後において肝心な内容研究を進展させる――もちろん方法研究も同時に行なう――ことにより満たされていくものである。それゆえ，どのように筆者が『地域主義の経営学』を構想し，展開していくかは，以後の課題となって残されている。

筆者が自著〔『現代経営学の基本問題』〕に収録した風土論関係の論稿末尾の付記で示唆したごとく，最近，著作集として公刊された『三澤勝衛著作集』全3巻は，筆者が経営学の立場から抱いている風土論への関心にとり，無視しえない論著の再刊である。そこで同著作集に盛られている「風土論」に関した検討内容を，あくまでも経営学的な観点でのそしゃくにおいてでは

あるが，ひとまず覚書の形式で詮索しておきたく考えたしだいなのである。この著作集の吟味をとおして，筆者が志向する＜風土論的経営学＞の，学問的な具体形態である『地域主義の経営学』にかかわった研究上の土台や足場形成の充実・強化が，達成しうることを期待したいのである。

三澤勝衛著作集全3巻の内容は，つぎのとおりである。同集の編者は矢澤大二，発行所はみすず書房，発行時は各巻それぞれ1979年4月，5月，6月である。

第1巻『郷土地理研究』――『郷土地理の観方』（昭和6年）と『地理学評論』への投稿論文を内容とするもの――

第2巻『風土論Ⅰ』――『新地理教育論』（昭和12年）の第Ⅰ部を改めたもの，一部は雑誌『地理学』に発表されている――

第3巻『風土論Ⅱ』――『同上書』の後半部分を収めたもの，本書中の第3章『風土産業』は3回にわたり独立の単行本として刊行されている〔昭和16，22，27年〕――

本覚書は，中心となる叙述内容として三澤の見解を，極力，生のまま，原文で引用参照するかたちをとって論及する予定である。また著作集の引用表記は，（第何巻 何頁）という形式で行なう。

*　　*　　*

三澤の風土論に立ち入るまえに，彼の業績に対する関係論者からの評言をいくつか聞いておきたい。

ひとつは，こういうものである。日本の風土論のなかで重要な位置を占める文献に，三澤の『風土産業』がある。長野県内各地を調査した三澤は，生活に密着した，また可能論を含んだ風土論を展開した。風土論も時代とともに変化しつつある。交通機関が発達し，大量生産の耐久消費材が全国一律に普及している現在，多くの面で日本の地域差は小さくなった。農業においても多くのエネルギーを投入する商品作物の生産が多くなり，日本の風土観は希薄になったように思われる。しかし大気と大地の境にのみしか生活することができないわれわれ人間は，地球上の生物と共存するための手段を考え，それを身につけておかねばならないだろう（福井英一郎・吉野正敏『気候環境学概論』東京大学出版会，1979年，26頁）。

この論評にある指摘は，今日，経営学がさけてとおれなくなった研究対象である大工業体制と，生態系の拮抗関係をめぐる深刻かつ重大な問題をさし示している。『地域からの産業論』（筑摩書房，1980年）という書物の編著者となった今井賢一は，三澤の「風土論」をこう評している。彼の風土産業論は＜ソフト・エネルギー・パス＞の考え方を，すでにしっかりつかみその風土産業論の中心的な論点としており，まことに注目に値する。そしてそこには「地域からの産業論」の原点があるともいう。なぜなら，三澤の風土産業論の現代版は，バイオマス（このことばは，狭義には微生物をさすが，最近では農産物・林産物・家畜などを含めて広く生物資源を意味する）を

中心とした地域産業論にほかならないからである。三澤『風土産業』は，地域の綿密な事例観察をふまえた実証研究を行なった（日本の産業4 今井賢一・中村秀一郎編『地域からの産業論』8-13頁，294-295頁）。

筆者が「経営と風土の接点」という交差点的な問題次元で論点を考え，『地域主義の経営学』を構築してみようと意図したことと，三澤「風土論」との濃密な関連性の存在はいうまでもない点である。とはいえ<地域主義>とはなにか，それを冠した経営学が，どのような体系や内容を有するのかは，なお今後の課題である。ひとつの見通しとして，生態経営学（Eco-business Management）という具合に筆者が発想してみた学問志向などは，理論および内容の具体的展開を，まだ少しもみていない試みだが，風土論的経営学→『地域主義の経営学』の方法（論）的理論的な地盤を固めるひとつの現実的な接近法といえるかも知れない，そういう見地になりえよう。それに三澤の論旨にも，理論的批判を与えれば，また今日的に評議すれば，問題性がないわけではない。この論点は本稿で，のちに論及の対象にするつもりである。ともかく三澤の見方，考え方を十分に聞くことが，本覚書の眼目とするところなのである。

II　三澤「風土論」の概要

——経営学からみたとりまとめ——

i）風土解明の必要性

三澤は，まずこういう。私どもの生活はそこの風土と離れては一日も生活できないというほど，その風土と密接な関係をもっているのであるから，その生産生活にしても消費生活にしても，ないしは精神生活にしても，つねにそれを重視しておらねばならないわけである（第3巻，75頁）。ここで三澤は，風土が人間生活の全域，すなわち自然・環境としての風土の次元から精神・社会・文化としての風土の次元まで，そしてその間に多岐的に含まれ，関係し営為される生産と消費生活全般に，密接なかかわりをもつ事実を指摘している。さらに彼はこう述べる。

> 現代の文化が単なる人類の自由意志や経済的機構のみで発祥し発達したものの如き思想を植付けてはならない。われらの努力はその一見単なる経済的機構や自由意志の結果の如く見えている文化をさらに分析し，解剖し，純化し，そしてそこに潜在している地域性の活躍，地域の力を発見し，やがてはそのいわゆる人類の自由意志的表現もさらに根本的にはそこの地域の大きな制約を受けつつあること，また然らざれば完全の成果も望み得ないことを十分に理解させなくてはならない（第1巻，81頁）。

ここでの三澤の意見は，唯物史観と唯心史観をのりこえ，統合している要因→風土〔的規制〕を重視すべき見方を主張する。いわゆる土台＝上部構造の契機を尊重したすえに，なおかつ風土問題のありかと，この問題の関連性を大切に観察することの必要性を強調しているとみてよい。今日の科学，わけても社会科学の一員である経営学に欠落しており不足している観点が，そこに存するといってよいのである。

三澤は科学の研究はなにも自然を征服する武器を発見するためではなく，自然に順応する途を求めるための努力でなければならないといい（第3巻，47-48頁），さらにつぎのようにいう。

> われわれ人類が，そのあらゆる活動に際し，その大自然を背景として立とう，常に大自然に相談をし，大自然，すなわち神の命にすなおに順って活動し，自然も生かし，同時に人間もよりさらに大きく生き得る，さらに言葉を換えて申しますれば，真に「神人合一」の心境で，より人間を偉大にかつ幸福なものにするような，そういった将来を念願して止まない（第3巻，48頁）。

今日にいたり大工業体制が自然の法則を軽視し，環境を破壊する基因となっている状況下において，工業と生態系の調和――調整ではない――を真剣に模索すべき段階にまで事態はさしせまっており，深刻化している。このさい三澤のいうような「風土論」が強く要請され，学問進捗においてもそうした観点が必須となっている。

三澤が自然への順応＝「神人合一」の心境を唱えるのは，さらにこういう意味あいからである。つまり作物の栽培にせよ，家畜の飼育にせよ，さては工業から商業にいたるまで，たとえば土木事業にいたるまで，一方にはその風土をしらべ，一方にはその作物，家畜，製作品，土工の性質を究め，できるだけその両者の調和し融合するようなものを選択し，とりこんでくることが，換言すればきわめて自然に近いような形にととのえていくことが，もっとも意義のある地方開発になる。われわれ人間はただすなおに一種の「触媒」としての役割をもつものと考えることこそ，真に人間としての，すなわち天命の役割をはたしうる。要するに自然を征服するどころの話ではない。また征服できるものでもない。否，かえってその「自然を生かそう」とする思想こそ，きわめて大切である。それがやがて真に力強くわれわれ「人間の生きる途」ともなる。そうしてまた，真にそれを生かす，これをわれわれは人間本位のことばで表わすに「利用する」ためには，すべてそれを大自然に聞いて，すなわち順応し，協調していくのが，そもそも本体であると考えるべきなのである（第3巻，47頁）。

このように彼は，人間本位に「利用する」ことは順応と協調を本体にすべきという。この彼の主張をどう受けとるかによって，彼の風土論のなかに「環境的決定論」の臭いを特別，感じとるか否かのちがいの問題が出てくる。この問題については，つづいて彼がこういうところを聞いておきたい。世間で「自然」を「征服した」というその事実をよくよく吟味してみると，いずれも実はその自然のもつ「大法則にしたがっている」。すなわちその自然のもつ法則を発見し，その法則に完全に従えばこそ外面的には征服したかのようにもみえる，と（第3巻，26頁）。筆者が≪生態経営学≫的アプローチに想到し，『地域主義の経営学』を風土論的経営学として展開しようとする場合，この三澤の思考方法は欠かすことのできない見方である。今日の工業がもたらしている公害（工害）・環境問題の根源は，現体制のあり方が自然の法則を無視し，自然・環境を破壊しつづけているという弊害の惹起に見出せる。この体制をどう変革しようとするのであれ，三澤の提案は活用されてよい学問的価値を有すると解釈してかまわないだろう。

風土すなわち大自然の持っている力，とくにその底力は，とうていわれらの想像も及ばないほど微妙でありかつ偉大でもある（第3巻，225頁）。「自然の妙技」そのものである（第3巻，225頁）。「風土」のように，しかもそれが，そこの大自然の一部であって，多くはほとんどなんらの報酬も要求しておらない，したがって価格もないその風土が，その実際生活に深い交渉を持っている（第3巻，7頁）。その風土性に対する徹底した認識や理解を得るためには，さらに遡って，一般人士の大自然に対する正しい認識と理解とが重要視されるわけでもある（第3巻，21頁）。言い換えれば「風土性に対する認識並びに理解の向上普及」という（第3巻，50頁）ことになる。

われわれは，風土すなわち大自然の力を科学的に解明する任務がある。三澤がいうような，＜価格もない風土＞が，たとえば――本稿を書いている時点で聞いたニュースとして――工業化のため埋め立てられた場所〔海岸〕に30億円也を投資して，地方自治体（横浜市）が砂浜を，千葉県からその材料を買って，作らなければならないというような出来事に，出くわすとき，いったいなにを思い考えればよいのだろうか。それは＜価格のない風土＞を無視した自然利用のすえ結果した，負（マイナス）の＜価格のある風土＞を，もとの状態＝＜価格のない風土＞に修復させるためにかかった費用（コスト）の発生とみてよいものとなろう。

ii） 風土性とは（定義）

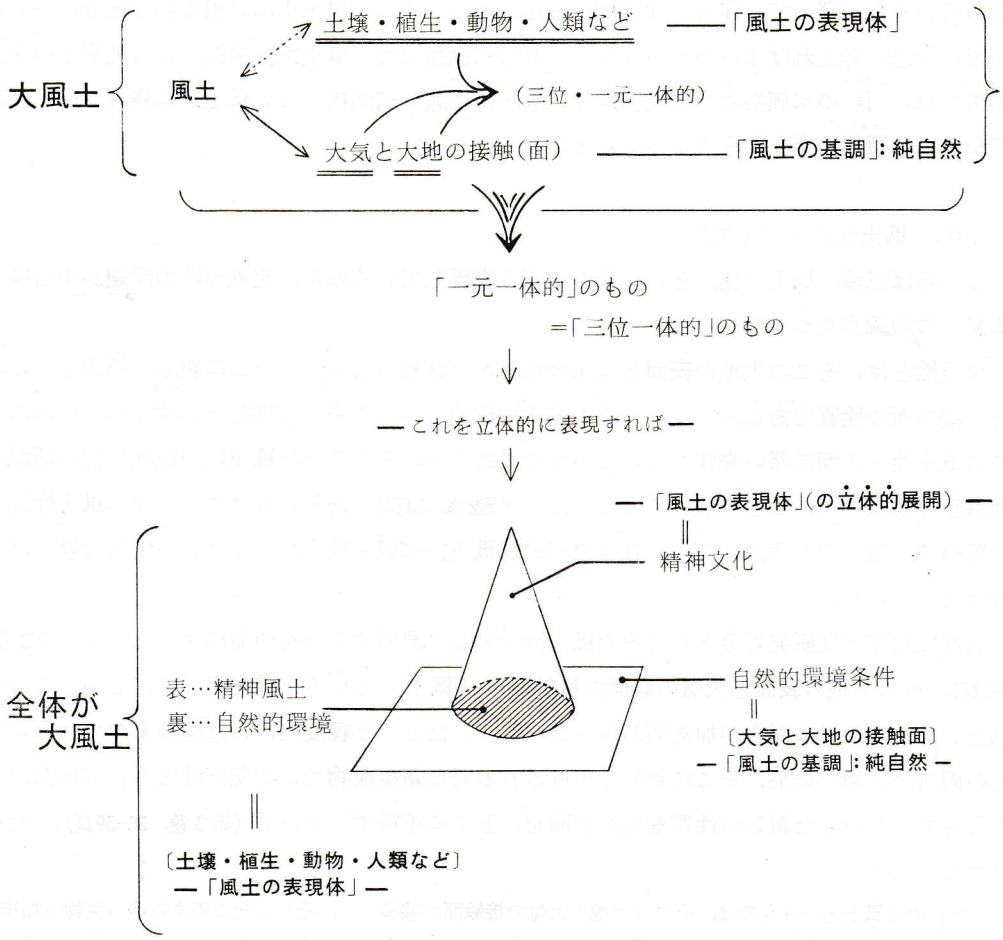
しからば三澤は風土（性）というものをどう表現しているのか。定義づけの問題が中心になるが，この論点をつぎに聞こう。

風土性とは，そこの大地の表面と大気の底面との接触によって，そこに新しく招来される，その接触面の性質である。だから，その産業や政治がいかにそこに即した，すなわちいかにそこの風土性との間に深い交渉をもってのものであるか，そこにその風土性の根強い力の活躍を理解させ認識させることを忘れてはならない（第2巻，34頁）。われわれはこの三澤の風土性理解を裏づける現実的な物証として，日本の＜政治風土＞＜経営風土＞とよばれるものを思い浮べればよいだろう。

三澤は地理学は研究対象としてその風土性を中心に究明するのを使命にするという（第2巻，161頁）。彼は大地の表面と大気の底面の接触面に「風土」という名前を用いる。しかもこの接触というのは，単に両者が加えあわさった，混合したという程度だけの意味のものではない。その両者の接触の結果，そこに新しく生成されるその新生成物で，大気だけでも，大地だけでももっていなかった新しい性質を含んだ面を，とくに重視するという（第3巻，58-59頁）。それだけではない。

いわゆる風土というものは，そこの大地と大気の接触面を基調とし，それにそこのあらゆる生物を加味しているもので，その三者が互いに関係し合って完全な一体となった，すなわち三位一体的のものであること，しかし大地と大気の接触〔風土(性)〕そのものが基調で，生物の参加する，しないは必ずしも絶対的必要条件ではないということ，しかし，おそらく今日地球上いたる処，多少にかかわらずその生物の影響を持たない処はかえってきわめて稀であろうから，そういうように断わってはおくものの，事実はその三位一体的のものが普通である（第3巻，73頁。カギカッコ内補足は筆者）。

そこで三澤は，大切なこととして，そのように三位一体的な関係でできている風土そのものを，私どもが直接その五感で把握，すなわち実見・観察のできるのは，そこのその土壌とか植生とか，動物，人類等のそれであるとする。そこでこの意味から，それら四種のものを三澤は「風土の表現体」とよんで区別しておくといい，これら四種の現象を透して，そこの風土の性質を知る，究めるという（第3巻，73頁）。現在の経営学的な興味範囲でとらえるならば，その研究対象＝「風土の表現体」（四種の現象）を媒介にとりあげる手続をえて，経営問題と風土性の



注）上図のうち下部は，宮川英二『風土と建築』39頁の付図を応用し，説明したもの。
下部の図解について，ゴチック字体の部分は筆者が加筆のもの。

関連次元を拡大させながら，格別に「経営と風土」のかかわりあいを究明することになるといえよう。筆者が生態経営学というような発想を提唱してみなければならなくなった深因は，今日まで経営が風土（性）を尊重するどころか，それをないがしろにしたあげくのはてに，風土からのしっぺがえしを経営が否応なしに受け，われわれ人類の生物的・生命的な存在に関する危機的局面さえも招いている点に求められよう。

風土は個性的性格の強いものである（第3巻，172頁）。そこの風土を織込めば織込むほどその生産物は特色化され，需要化される。同一の型の機械を同一の様式の工場へ据付けたとしても，その工場の立地の持つその風土性の相違，すなわちその影響をぜんぜんなくするのは至難のことだろう（第3巻，173頁）。

ここまで議論がすすむと，風土なるものは，そこの生物から人類のそれへまで拡がった，より大きな一体的なものになる。しかも単に一体的というだけではない，また明らかに一元的でもある。すなわち「一元一体的」のものとみることが妥当である。だから単に大気と大地の接触だけではなく，この一元一体的のものを風土とよぶべきで，したがって大気と大地の接触だけのものは詳しくは，それを「風土の基調」とよびたい。それに対して他方は「大風土」とよんでもよいものと三澤はいう（第3巻，216頁）。さらには，風土そのもの，とくにその基調となっているものは純自然であるともいう（第3巻，219頁）。

さきほど三澤は，三位一体的の関係と称して把握したものを，今度は「一元一体的」にと，風土をよび，とらえている。とはいえ，いわんとする核心は「一体的」に同じと判断できる。ただ風土に関連する概念内容として，細目区分を加えていたので，このへんの三澤のいいぶんを，筆者の理解なりにはっきりさせておこう。

前頁の図のようになろう。上部の図解が三澤の風土（性）概念自体に関する解説であり，下部のそれはまったく他者の概念図を借用した，三澤の風土（性）概念に対する再解説である。

iii）時代性と風土性――時間性と空間性――

三澤は風土性（地方性）を時代性との関連において詮議している。こういう。

万物は常に流転する。その間栄枯・盛衰・浮沈というものを伴っている。その結果，時に時代性のとくに強く顕現される場合もあれば，地方性（風土性）の顕現される時もある筈である。いわば文化の進展というものはこの両性の間に振動している一種の振子運動かも知れない。そしてその今日は，たまたまその振子が，はなはだしくその時代性の側へ片寄った，そういった時代に当っているのかも知れない。

いかにもその外見はそうである。しかし，他の一方の地方性の力が全然なくなっているのではない。なくなっているどころではない。絶えずそれを，地方性の側へ引戻そうとして働いているのである。したがって少し気をつけて観察すれば，われらはそこに地方性の厳然たる存在を，そう大した困難ももたず，幾らでも発見することができる（第2巻，17頁）。

明治以来，日本の近代化，産業化（工業化）の過程――時代性→生産力発展の側面――は，地方性（風土性）を，いかほど軽んじながら進展してきたのかを考えてみればよい。工業化（日本の場合は資本主義化）信奉のあまり，地方性（風土性）の厳在問題に無頓着でいられた結果，今日の環境・

公害問題の深刻化は極限状況に到達している。こうしたむずかしい状況をふまえ，とりわけわれわれが顧慮すべき風土（性）問題には，つぎのような姿勢への傾注が必要といえよう。

今日，究明の対象となっている風土性は，その——風土の——表現体としては，もともとそこの過去から現在にわたっての範囲において，収集・選択することが当然であり，さらに将来にまでもちつづけるべきものとなる（第2巻，188頁。傍点と傍線内補足は筆者）。もっとも風土性なるものは時代性のようにそう著しい変遷はしない。しかし，ただそこの風土性が，そしてまたその風土性のどういった方面が，とくにはっきりと現われてくるかということは，これまたそのときの時代性によってそれぞれ相違がある。したがって事実，ある地域のもっているその風土性のなかのそのある一方面で，いまだかって過去にも現在にもはっきり現われ出なかったものがないとは断言できない（第2巻，336頁）。現今の段階にいたって数多く現出しつつある自然・環境の破壊や汚染という現象において，人類に返済されることになった風土〔の側から〕の反撃——食品の危険化，生活環境の悪化など—— は，時代性を媒介にした風土性の人間性に対する仕返しであり，いまだ人類が知らざる風土（性）の素顔の一面であるかも知れない。これがまた，風土性存在のしかたの一貫性かも知れないのである。

だから風土性理解の困難さはこういうことにある。つまり風土性が全然変化しないというのでもなければ，したがってまた，将来その新しい時代に新しく初めて出現した風土性が，必ずしも今までそういった時代の到来するまで潜在していたものだけだと断言しうるからでもないことである（第2巻，337頁）。われわれが現在まさしく体験している風土（自然・環境）破壊の問題は，人類・人間が加えるそれへの加工〔人工〕を，その基幹的な発生基盤にしている事実を考えれば，上述で三澤のいわんとする趣旨は痛切に伝わってくるし，またわかろうというものである。風土性の変化うんぬんの問題，つまり潜在していなかった風土性の発現の問題である。

ともかく，文化の変遷すなわち時代性そのもののその根底には，この地球のもつ自然，すなわちそのひとつである風土の力がつねに潜在して働いているものと考えることもできる。否，かえってそれが正道であろうと考えたいと，三澤はいう（第2巻，343頁）。その風土の表現体というものは，その緩急の相違こそあれ，その各時代時代のいわゆる時代性とともに変遷してきたにちがいない。そうしてたまたま，そのある時代において，その時代性との関係上，表現された，その風土のある性質が，その時代性のうつり変りとともに，ついにまた潜在してしまっているかも知れない。今ここで究明しようとするその風土性は，その顕在と潜在とを問題にしているのではない。できるかぎり，その完全な，あらゆる風土性そのものである（第2巻，187-188頁）。

> 要するに，根本的には万物は時間的にも空間的にも一元一体化しているのである。いかにも諸行は無常のようでもあるが，またその中には永劫一貫的のものも蔵している。したがって，一木一石皆その万物のもつ本質を表現している。もちろんそこの風土をも表現している。が，ただその表現の仕方に，われわれ人類から見て明瞭さの程度に相違があり，鋭敏さに違いがある（第3巻，145頁）。

今日の学問ほど，自然科学と社会科学とを問わず，三澤のいうような，自然・風土に対する

鋭敏さが科学的感覚として要求されている時代はないといえよう。要は以下のごとき学問的な究明の必要である。

あらゆる事象の観察に対し，その事象がその事象出現の立地，とくに，そこの風土との間にいかに密接な交渉を持っているか，言い換えれば，その事象の中にそこの立地，とくに風土を発見させるべく努めなくてはならない。

同一種類の事象について，異る立地間においての比較観察が絶対的に必要である。しかもさらに，その同一種類の事象が，その立地の変化につれて漸移して行くその点を明瞭にすることが要求される（第2巻，50頁）。

ここで三澤が強調する視点は，基底における風土性問題の存在，またこの風土性の究明が空間的に同時比較される手順とともに，時間的に継続比較されていく手順も，あわせて提示していることになる。いわば<比較風土論>の視角 ——空間性と時間性，地方性と歴史性の二方向において—— を示しているわけである。この点は，経営学の領域でいえば，風土問題との対面関係において経営問題が検討されるべき必要性を，三澤が風土論なりに，要請していると解釈できよう。すなわち比較経営学の方法観点に風土論的接近を注入し，それをきたえるという意図の必要性を感じるということである。

こういうことでもある。人類生活の様式で考えてみよう。消費に関する衣食住の方面があり，生産に関する産業，交通，そのまた産業方面でも，農工商といったような区別があり，またその農にしても，耕種・養畜，さらにまたその耕種にしても，その地方地方によって栽培される作物の相違があり，また同じ作物でも，それぞれ品種によって，その栽培されている地方地方の風土によって，それぞれの特色をもっている（第2巻，167頁）。しかし問題は，人類の生活様式が，けっしてすなおにそこの風土性のそのままを表現しておらず，それを明瞭にするためには，意外に多方面の手数をわずらわさなくては決定できない場合が普通である。つまりなにも人類生活の様式が風土に関する唯一の表現体でもなにもない（第2巻，165-166頁）。人類の生活様式というものは，単なるそこの風土性そのままの反映ではない。よしまた反映であったとしたところで，その風土性そのものの全面の反映であるとは決っていない。否，かえってその一面か二面，要するにある一部面の反映の場合の方が非常に多い（第2巻，175頁）。

したがって筆者の立場からみては，こうした三澤の風土論の社会科学的な展開——敷衍——に，ひとつの手助けをなしうる立場として，経営学が風土論的アプローチを志向する試みが，それなりに意味をもちうることになる。風土論と経営学が協力，提携するなかで，「一つの風土という公約数」（第2巻，93頁）の問題次元において，「その地域のもつ風土性」（第2巻，155頁）を経営学上の論点にとりあげ，理論的分析の対象にすえる作業は，きわめて有意義な課題になりえよう。

三澤は，それゆえ「わがこの全日本の持つ統一のある，しかも，その風土性の認識」（第2巻，265頁），いいかえては「日本列島のもつその風土性の統一性，独自性」（第2巻，306頁）の認識を，

くりかえし高調している。それも，その全日本のなかには，それぞれのより狭い地方があり，その地方が狭いながらもまた，それぞれの地方固有の風土に立脚した大きな役割をもって，つねにその「全日本」の構成に携わっているのである（第2巻，239頁）。この主張は「比較風土論」——ひいては「比較経営学」——の観点のあり方いかん〔どの契機や次元に風土性把握・認識の単位をおくかの問題〕を示唆するものである

iv）日本の風土性を研究する意味

前項では，三澤が風土研究をする場合に自国の日本のそれを対象にし，焦点を合わせていたことが叙述されていた。彼はこの点について，なおこう述べる。

研究者としてまず，その研究対象地域を郷土少なくとも準郷土として生活しているもの，すなわち，そこに生まれ，そこに育まれ，かつそこに働きつつある者において初めて成し遂げ得られるものであるということである（第2巻，41頁）。要するに郷土人が郷土に即しての観察・実験・調査という点が，そもそも，郷土地理そのものの存在の大きな根底となっているのである（第2巻，43頁）。

「体験のないところに理解はない」（第2巻，47頁）。

今日の教育があまりにも「机上の教育」に偏している（第2巻，80頁）。

この三澤のことばは，今日の日本経営学界の現状のなかで，反省しきりとなっている問題性——欧米理論の重視・日本の現実軽視という学問的風潮——に関して，いわれているものかと思えるほどである。ここで筆者は，日本経営学会（界）の歴史や特性をあらためて説明するつもりはない。が，筆者が日本の経営学にむけて，風土論的経営学の視点から『地域主義の経営学』を構築しようと思いはじめた最大の理由は，上述引用にある三澤の見解が，日本の経営学に対しては至言としてあてはまってしまうほかない伝統しか，もちあわせていなかったという事実を痛感するがためではないかと考えている。おそらく関係学界方面の相当数の識者の耳に痛くひびくだろう主張が，つぎの三澤の発言のなかにあるはずである。

なにもことさら遠い外国の，よし日本にしたところが容易に見ることのできない地方の，しかも恐ろしい複雑な内容を持った製鉄場や，製紙場のそれをくどくどしく説明する必要は少しもない。いかにそれが簡単な内容を持った人工物であったとしても，彼らが各自その自己の心身の発達の程度に応じ，それぞれ実見・観察をしながら，真に理解し体験したその地理的能力は，やがて他日，そういった工場の観察，見学の機会には進んで立派にその機能を発揮することであろうし，またそれで十分でもあるのである。否，それがかえって理想に近いわけでもあるのである（第2巻，99頁）。

日本経営学を，今日までの状況においてみるとき，こういった彼の主張からは，逸脱する学説・理論研究ばかりが，やたら目につく。三澤の言辞でいえば，やはりまだ学問がほんとうに身についていない証拠である。いいかえれば，生活化されていない，実際化されていない。単に言葉や文章のうえの学問だからである（第2巻，104-105頁）。一言はっきりと筆者なりにいっておこう。アメリカ経営行動論やドイツ経営組識論を日本（人）の学者が理論的に活字や文章のうえで学んだところで，その学者にとってそれがいかなる意味をもち，いかほど生活化され実際化される可能性があるのか疑問はつきない，と。このことは学問の世界，理論の舞台・場に

おける問題として，筆者がいうことである。三澤はまたさらにこういう。体験のないところに正しい知識も感情ももつことはできない，と（第2巻，116頁）。ついでに筆者はいっておきたい。その三澤の言も，理論的な場所においての話である，と。というのも，それは体験至上主義，体験絶対化→現実・現象追随主義を意味する言及ではないからである。

したがって生活のない，体験のない，否，持ち得ない，さらに言い換えれば郷土的の色彩の薄い，あるいは欠けた事柄については，われらはその適当な時期まで，すなわち，彼らの生活にそういった機会の到来する時までそれを保留しておかなくてはならない（第2巻，263頁）。

今や，その<保留>をとく時がきた。日本の経営学は，このところ「日本の経営」現実存在に即した理論分析と未来展望をしなくてはならないはめに追いこまれている。このへんのことを三澤にたずねると，やや抽象的にではあるがこう答えてくれる。

なるほど，あらゆるすべてのものは，過去・現在・未来一貫一体の存在であるから，その現在を見詰める，詳しく観察・調査することによって，そこに未来を発見することができる筈である（第3巻，139頁）。

日本の経営学がその真価を問われているのは，「経営政策論」的な理論性であり，現実問題に対する理論上の提言力，実際問題と根底においてふれあえる力である。日本の経営学は，この国の場において，あるなりに経営理論を用意して日本の経営現実に対峙しながら，自己の理論の創造と発展を独自にはからねばならない時期にきている。経営学を風土（論）的に見直す機会がやってきたのである。

v）風土に即した産業――「風土産業」論――

三澤は自己の風土論に関する主張を，地理学的な視圏より経営論・産業論にむすびつけて議論を展開する。この問題については，まずつぎのように主張している。

われらが風土そのものも，もちろんその大宇宙の，ただより大きな一場面であるわけである。

そこの大風土を，どこまでも大風土らしくするべく，自身さながら，その大風土の化身かのようになって，その毎日を意義づけて行くということは……，結局，その生活を美化し堅実化するものであると同時に，またそこの風土そのものを美化することともなり，否，かつその両者を共に偉大化することともなる（第3巻，231頁）。

要するに，今後の産業は，もっと頭を働かせた，もっとそこの風土に則した，さらにいいかえれば，より大自然に則した，すなわちその大自然を基調としてのものでなければ，真の堅実な産業として安心しているわけにいかない。そうでなければ，とうてい市場生産の優勝者たりえない。かりそめにも，われらがこの地表，すなわち風土に浴して生活している以上は，ひとり産業だけのことではない。なにごとでも，まずそこの風土に聞いて，風土に従って，別言すれば風土の奴隷にまでなる気持で善処すべきものである。産業だけについていうならば，いわゆる風土産業を基調としてこそ，はじめてそこに産業としても，地方としても，両者ともに意義あるものが実現される（第3巻，202頁）。この三澤の見解が「地域主義」の経営学の構想にさしむけるべき基礎的な考え方として，方法的に応用されるだろうことは多言をまたない。地域主

義の主唱のひとつとして，具体的にいわれている大事な論点は，以下ような三澤の論及中にも並行して読みとれるところとなっているからである。

由来廃物を出すということは，産業経営上のきわめて幼稚な経営形態である。今日化学工業の普及・発達・旺盛はあまりにも周知に属するが，その普及発達のそもそもの根源はと調べて見れば，その製造課程のその間において，ほとんど廃物らしい廃物を出しておらないことである。その出さないで済むようになった，そこまで進歩し得たということが，その普及発達の最も有力な根底である（第3巻，199頁）。

ところが，現代資本主義体制にある，とくにわれわれの住んでいるこの日本という国では，その化学工業の進歩が，大変に顕著である――廃物の排出を除去できる態勢があること，そうした発展段階に到達していること――にもかかわらず，一方ではそれをせきとめ，廃物の利用を怠り，工程外に放出，放棄しているため，公害・環境問題を惹起せしめる結果をもたらしている。三澤のいう化学工業の進歩とは，たとえば，石油（原油）の精製後，灯油しか使えないような化学工業の発展段階から，その全製品活用可能な発展段階への進歩をさすもの，と解釈してよいだろう。しかしながら，いうところの「廃物らしい廃物を出しておらない」などとは，とうていいえない，現体制現段階における日本経営・経済をかこむ枠組を意識しつつ，さらに，三澤の，展開する<地域主義>に関係してくる主張を拝聴してみたい。

三澤の「風土産業」論の基本的な考え方はこうである。そこへエネルギーを固定する。そこの風土に対し，その固定力のもっとも強い，活力の大きい植物なり作物なりをもってそこの山野を充実させる。緑化するということが，そもそも風土産業の根底なのである。そうしたうえで，さらにそれに動物を配するなり，工場を設けるなりして，それをより価値化し，価格化していくのが，一般産業の原則であると彼はいう（第3巻，193頁）。というのは，いかに今日の人たちが，その大自然の真相，したがってその法則の厳存を軽視し，無理解でいるかを察知するにあまりあるほどであり，これではとうてい地方の振興など覚束ない話であるからとする（第3巻，191頁）。さらに三澤は，もっともそれがいかに風土産業だからといって，あるいはまたそれに近い産業だからといっても，単にその産業一本立では，それは経営上，無理である。その風土的産業を主体とし，それに産業の内容に従って，いくたの補助産業をもたせなければならないとも述べている（第3巻，199頁）。

三澤は，こうして，風土そのものをもっとも充実した姿にまで発展させようと念願し，もっとも利用価値の高い姿に，そこの風土の表現体を整理することを努力目標にしている（第3巻，182-183頁）。これを風土産業の基調とするというのである（第3巻，178頁）。

すなわち，私の主張しようとする産業は，その経営の中へでき得る限り，欲を言うならばほとんどその全部を，そこの自然の力に求め，そこの自然に即した生産物を生産する，それへの努力を期待している……。

しかし問題は，口でこそ「そこの自然に即した生産物」云々とはいうものの，「そこの自然」と，「生産物」言い換えれば「そこの生産物」とをどうやって組合せて行くかということである。これはきわめて重大な問題である（第3巻，179頁）。

この問題について三澤は＜農学＞と＜工学＞のすばらしい進歩があって，それらと密接な交渉連絡をつけることによって，経済的生産物として市場にその「生産物」を活躍させうることで，解決の途があるという（第3巻，180頁）。このことは，いかにしてそこの風土を，その作物の要求する風土に，人工的に補完しうるかを考えることでもある（第3巻，168頁）。いずれにしても問題は，なにが比較的一番そこに調和しているかという点にある（第3巻，158頁）。

とにかく，そこの風土性を見出し，その風土性を基調に，それぞれの産業を計画するのでなければ，とうていその地方の産業というものは発展しえない（第3巻，152頁）。風土そのものは，まことに純自然物である。すなわちその大地も大気も，したがって接触もすべて自然そのものである。したがって，われらがそのままそれを，その産業経営のなかへ織りこむことができれば，そこには明らかに有価値・無価格のものが織りこまれているわけである（第3巻，155頁）。それゆえ根本問題はこうなる。

> そこの風土に適した，言い換えれば，さながらそこの風土の表現体かと思われるような作物なり家畜なりまたは商工業なり，要するに産業をそこに興す，さらに言い換えれば，そこの風土のその持つ力を十分に発揮，活躍し得るように努力する。そうした時に初めて，そこに真の地方振興もあり，地方の充実もある（第3巻，146頁）。

三澤はこの点について「適地適業主義」の意味で「風土産業」（論）を唱えている（第3巻，56-57頁）。工業とて＜人工風土＞を作り出せるが，それには生産費がかさむゆえ，風土性を極力織りこんだ，それに立脚した工業とした方が真に強みのある，いわゆる意味のある地方産業ができる（第3巻，42-43頁）。風土に則した工業を興すことである（第3巻，41頁）。

したがって，そこの風土性を基調にそこの産業を計画すべきで，いかにもそこの風土に順応した，すなおな計画を立てるべきであると三澤はいう（第3巻，12頁）。さらに，生産費低下のもっとも有力な方法としては，その生産過程のなかへ，そこに価格を要求しない，そこの大自然すなわち風土のようなものを巧みに織りこんでいくことが，その基調と考えられなければ，まことに危険，無謀である（第3巻，13-14頁）。商業の方面でも，単なる信用や奉仕だけではなく，さらに，われらの要求している風土性 ——具体例として，ある地方における店頭の商品が春夏秋冬その（地方の）季節季節によって変えられつつある一事，しかもこれが地方ごとにそれぞれ季節的差違をもっていること—— までも，すでに加味されている（第3巻，16-17頁）。こうした三澤の風土論的産業論＝風土産業論にかかわる主張は「環境（的）決定論」の危惧を，即自的な場面において含んではいるものの，今日的な立場で再考を与えるに，それなりに現在的に重要な提言をなすものと評価してよいものになるはずである。われわれがその危惧の念を抱くという論点は，のちに検討の対象としたい。問題は，今日に生きるわれわれが現今の産業・経営の存在が急激に噴出させている諸課題に対面するなか，その三澤の思想をいかに活化せしめ有用たらしめるかにあるといってよい。

その三澤の「風土産業」論の思想を，もう少しくわしく聞こう。風土に即した産業をその各

地方がもつことは，いわゆる地方振興の原理でもある。そこの風土すなわちその個性的である地方のもつ地方性に即した文化の建設ということが，もっとも正しい地方振興の意義である。すなわちその各地のもつ文化が，どこまでもそこの地方のもつ風土性を基調として建設され，しかも一枚の紙の表裏や，ひとつの身体の手足が，互いに相寄り相まって，はじめて全一体としての紙となり身体となって，健全にその使命を果たしうるがごとく，真に正しい人類文化が出現するわけである。そのもっとも根本的作業としては，今日われわれ人類の一般が，ほとんど忘れていたかに思われる，そこの地方に即したその風土性の存在およびその機能に対する理解，さらに根本的には大自然の存在およびその偉力に対する理解に待たねばならない（第2巻，24-25頁）。

各種工業の分布が，そこの風土と密接な交渉を持っての結果である（第2巻，49頁）。顧客までが，その産地と値段とによって，その方からその品質の良否を決定している（第2巻，109頁）。

既存の社会科学の現況に対する，三澤の批判には手きびしいものがある。日本の風土の特殊性，この日本の各地方における風土性に無関心であり，それとの親交をもたなかったわれわれの学問に対して，こう批難する。

かの単に経済学や経営学だけの立場で，まったくそこの風土性抜きの，否，経済学・経営学書一点張りで，私はあえてここに「書」という，机上の空論という別名でもある，そういった主張までが手伝って，すで二兎を追うもの一兎を得ずというその戒めのあるのも忘れたかの現況は，いったい何をわれわれに物語っているのであろうか（第2巻，296頁）。

日本の学問によくみられる，輸入・翻訳科学（→解釈・訓詁学的形態）の，日本の現実に対する盲目的適用を，三澤が批判していることは申すまでもない点である。三澤の論旨が経済・経営の場から文化や人類のあり方の問題にまで，風土性をてこに，広がっていることは，最近における「経済人類学」の主張が＜地域主義＞との関連性において出現している事実を鑑みるに，興味深い。

要は三澤の風土論の根幹における観点は，こういうところにある。

自然そのものには本質的には無駄はない。それを無駄とするのも，有効とするのも，ただ一つにわれら人類の出よう如何だけのものである（第2巻，325-326頁）。

いわゆる宇宙時代，少なくとも太陽系時代ともいうべき太陽を初め，大宇宙のエネルギーを，もっともっと自由にわれらの生活に織込むことのできるような時代の到来を予想してはいる。

要するに一つの国家の興亡盛衰において，その最も有力な，否，根本的原動力というものは，その国のもつ風土性がその当時の時代性に対し，どの程度にまで調和しておったか，その調和度の如何という点にある。

日本帝国のもつその風土性が，今日およびさらに今後においていっそう進展するであろうところの，その海陸併合のその時代に対し，現在いかなる程度の調和にあり，さらにまたいかなる程度の調和にまで進み得べき可能性を持っているであろうかに想到する（第2巻，334-335頁）。

最後の段落における三澤の主張は，戦前的思潮から自由でなかった叙述であることを確認しておき，全体として，以上の論及でいわれている核心は，今日われわれが資源・エネルギー問題への対処においていかなる態度をとり，今後の方向を見定めればよいのか，まことに適切な

方策が先取りして提唱されている点を，はっきり読んでおくべきところといえよう。もはや，この三澤の考え方にそって，一国のみならず，世界の，こまかくは，一地域・一地方における産業の運営や経営の体制作りが実行されねばならない段階に到達していることはいうまでもない。このことは，われわれが従事する学問に関して今日的に要求されている共通認識とみなしてよいだろう。

いわく，自然を無駄とするか有効とするかは，人類の出方いかんによるとか，太陽系時代として宇宙エネルギーをもっと活用できるようにとか，風土性を時代性にどのくらい調和させえているかが国家の興亡盛衰の根本的原動力であるとか，というふうにいわれる，今日の現実問題は，資本主義と社会主義の体制をこえて，われわれ人類が絶対に回避することのできない深刻かつ重大な課題として，眼前に位置している状況にある。

Ⅲ　問題点の考察

今日的な視点より三澤の風土論を評価するに，それは，きわめて価値の高い内実があることを，本稿は論じてきた。しかし三澤に問題点がないわけではない。彼の風土論の短所をよく知ることは，一方でその風土論を，今日的によりよく生かす方途になりうる。この前提をおいておき，三澤「風土論」の問題点をしばらく吟味していきたい。

三澤の地理学理論上の問題は「環境論」的傾向・自然主義にあろう。現代文化を単なる人類の自由意志や経済機構のみが生み出したものとする「都市至上論者や一部の文化評論家」に挑戦し，文化のなかに貫徹している＜地域性＞＜風土性＞を発掘することに，地理学のレゾン・デートルを求めた。すべて根底に自然がある，文化は結局＜地理的文化＞にすぎないというのである。そこから，自然と融合し，地域，風土の特性を活かした産業〔風土産業〕の育成を奨励した。三澤のいう産業が農業や養蚕・牧畜といった自然の制約を受けやすいものであったことは象徴的である。資本制社会の段階では，人間の生活様式に風土性が直接に反映しないことは，三澤もまた認めるとおりである。現代文化の分析に用いるべき最大の武器は社会科学，とくに経済学であり，地理学がそこに参加するなら経済地理学としてであろう。ここでも自然的条件の解明は重要なテーマである。だが，たとえばその地方の資源をどう利用するかは，その国の生産関係・社会体制の性格が決定する。三澤が自己の風土的知見で地方開発に寄与しようとしたとき，それはつねに技術的助言であって，当時の状況（昭和初期のはげしい農業恐慌に悩む農民に対して）において増産法しか説けなかった。今日，新産業都市への道を歩む郷土の開発に教師が貢献しようとするなら，どういう態度が望まれるのであろうか。日本経済の動向，高度経済成長政策と地域住民の生活現実との緊張について理論的でアクチュアルな認識をまず深めることが求められていよう（『三沢勝衛著作集・月報』1979年5月，第2回配本 第2巻「風土論」1 付録，宮坂広作「三沢勝衛先生の地理教育論」7－8頁）。

三澤「風土論」の問題点は，まさに「環境的決定論」ないし「風土的決定論」という地平から完全に飛躍しきれていないところに，その因がある。しかし三澤の趣旨は，今日の産業経営問題に対する「反命題」的特徴をもつという性格に着目して評価するとき，その欠点を補ってあまりある意義づけを付与されてよいだろう。現今の産業経営が忘失し，認識の彼岸に放逐してしまったと思いこんでいた，「風土観」の必要性や見直しを，彼の風土論を助けにしてひとまず回復させる企図がいままさに要求されているからである。ある筋からは，地動説に対して天動説的な宇宙観〔→大自然観・大風土観〕の必要がいわれるむきすらある。このことは「環境的決定論」の危険をはらむ三澤「風土論」再評価の余地がまちがいなくあるだろうことを教えている。

もっとも，三澤「風土論」に対し危惧されている「環境論」(的傾向) については，つぎの点の留意が必要と筆者は考える。つまり，環境論者ともくされている人士の説くところは，単純な決定論であったかというと，けっしてそうではなく，またこのような論議は，かつて支持されたことがなかった。それゆえ，われわれは遠慮なく「環境論」なる表現を，本来の字義どおりに意味するまま使えばよい，とする意見である。<決定論>か<可能論>か，または幻の決定論に対するポレミーク的な批判までもが，今なおあとを絶つことなく出されているが，すでに1930年のはじめに解決済みの問題なのである（渡辺 光『環境論の展開』環境情報科学センター，昭和52年，13頁，70頁)。したがって注意すべきは三澤の所論をいたずらに「環境〔的決定〕論」の方へ限局しない留保→見方が，その考察において要請されていることである。

さらに三澤の問題性を考えよう。問題なのは，彼が「自然環境」なる章節のあとを受ける人文的・社会的現象を対象とする章節の内容が，先行する「自然環境」のそれとはまったく，もしくはほとんど関連なしに，極端な表現をするならば，それらをまったく無視している場合すらあることである。三澤の主張は，当時の農村を主対象にしたものであるその当時とは社会状況がまったく変わってしまった現在では，彼の主張をそのまま適用することはおそらく当をえまい。だがまた，三澤の風土論の提言した方向は，その先駆的な主張として，この方向の追求が，広く環境問題をめぐる討論において，地理学からの発言をよりいっそう強固なもの，説得力あるものにするのではあるまいか。地方振興には，まず風土の特性の活用を指向すべきを断固として主張したのは三澤であった（第3巻，〔矢澤大二「編者あとがき」〕239-241頁)。

経営学の陣営に属している筆者としては，三澤「風土論」の問題性をいやし，蘇生させるのに都合のよい場所にいる。もっともこちら側に学問上の見地として欠けていたものは，実は三澤のいうような――≪反命題≫的な――「風土論」的な分析視座であった。三澤の論著は，「発行は古いが，内容は実に新鮮」（第3巻，〔同上〕235頁）なのである。彼は，地域性の認識，地域性の解明という命題の重要さ，そのための発想と問題追求の論理性の不可欠さを，経験を問いつつ，具体的事例を用いて醇々と説きあかしていた（第1巻，〔矢澤大二「解説」〕viii頁)。筆者が「地

域主義の経営学」を発想しようとした契機は，そのひとつに日本の経営学が自国の風土性，地方性にうとい理論展開しかなしえていない事実をうれえるからであった。日本の経営学が自分の土地に密接し，土着化した理論構築を展開できるかどうかは，風土論的接近方法をその体内に血肉化しうるか否かにかかっているといっても過言ではないところと考える。

「風土」を地理学的研究の正面にすえる三澤の研究を支えたものは，鋭い観察力，隣接科学についての深い識見，それに発想の卓抜さであった（第3巻，〔矢澤「編著あとがき」〕236頁）。経営学の学問的特質からみて，逆に地理学・風土論との協力関係は必然的であるとさえいえる経路になろう。三澤がいうごとく，「風土」にはまた人類活動の跡が刻まれる（第3巻，〔同上〕237頁）。経営学の守備に入りこむべき課題が，ここにある。

三澤とは，かつて同業者（教職）であったある人物は，三澤の主張について，こう感想を述べていた。

今日，科学技術の時代と称して自然を征服してまでも，よりよい生活をしようという考え方が支配的だが，私は農業に従事するようになって，産業や生活が自然や風土に深く結びついていることを再認識させられている（『三沢勝衛著作集・月報』1979年6月，第3回配本 第3巻「風土論」2 付録，11頁に転載された〔『信濃毎日新聞』昭和54年5月20日の投書〕記事からの再引用―いわゆる孫引き）。

今日の大工業体制が破壊しつつあるものが，「自然力更生」（第3巻，48頁）という自然の再生産・生命力であった。「善悪はただ人間界だけの問題である」（第3巻，45頁）。「われわれ人間はただ素直に一種の『触媒』としての役割を持って……こそ，真に人間としての，すなわち天命の役割を果たし得た」（第3巻，47頁），といいうる時期がくるのは，まだまだこれからのことであろう。三澤「風土論」を学ぶ今日的意義は，それによって，必ずやその時期の登場をいくらかでも早められるだろうという点にある。

ツルゲネフ：自然は工場，人間は労働者。

*　　*　　*

三澤の学風は著しく実際的である。つまり受売り的でなく，抽象的でなく，実見と実例において組み立てられたものである（『三沢勝衛著作集・月報』1979年6月第3回配本 第3巻「風土論」2 付録，4頁）。この点では，和辻哲郎『風土――人間的考察』（昭和10年）と共通しうる性格を有しながらも，決定的に異なる特徴を包している。観察力と発想の独創性に関しては，三澤と和辻に同じ性格が含まれるが，実見と実例のとりあつかい，組み立て方は両者においてまったく別物であった。その差異は和辻が旧帝大の教授になった人物であった事実と，これに比し，三澤は地方〔長野〕の一教諭として教職をまっとうしたという事実において，学問への関与のしかたがちがっていたことに起因する。――なお三澤の和辻『風土』への言及もある（第2巻，79頁）。

著作集第2巻『風土論Ⅰ』の表紙カバーにはこう書かれていた。

本書は，もともと「風土論」または「風土の研究」として公刊されるはずのものであった。和辻哲郎著「風土」とは，ねらいも内容もまったく異なっており，真の科学的精神に裏づけられ，読者を体験と思索

の新しい地平に導かずにはいない生きた古典といえよう。

われわれが今日，三澤に学ばねばならない反「命題」的な学問上の主唱は，「地方振興は人々が風土を正しく理解し，風土に即する産業を興すことによって初めて期待される」（第1巻，〔矢澤「解説」ix頁〕ということになろう。

1980. 7. 15.

〔追記〕 <地域>と<地方>ということばは，厳密には同じにしえないことが，その後わかった。
重要な点なので，とりあえず記しておくことにした。

（べえ　ぶぎる　経営学専攻）